

総務市民文教委員会協議会市内被災地視察報告書

市内被災地視察における調査結果について、下記のとおり報告します。

平成30年9月14日

光市議会議長 木村 信秀 様

光市総務市民文教委員会協議会

委員長 畠堀 計之

副委員長 田中 陽三

委員 木村 信秀 (議長)

委員 田邊 学

委員 中本 和行

委員 仲山 哲男

委員 林 節子

委員 森重 明美

随 行 寺尾 貴志 (事務局)

随 行 松尾 真 (事務局)

記

- 1 視察年月日 平成30年8月2日 (木)
- 2 視 察 先 7月豪雨による市内被災地
- 3 調査結果等 別紙のとおり

1 視察目的

平成30年7月豪雨により光市においても甚大な被害が発生しました。光市議会では7月17日と27日に全員協議会を開催し、8月3日には災害復旧に関する要望書を光市長に提出いたしました。光市議会総務市民文教委員会協議会では、より詳細に被災状況を把握し委員会活動に活かすため、被災地の視察を行いました。

2 視察日時 平成30年8月2日（木）9時から12時まで

3 視 察 先 西の河原、木下橋周辺、三島コミュニティセンター、小野橋周辺、小周防ライスセンター周辺、旧さつき幼稚園駐車場、横尾川、溝呂井川

①西の河原川



②島田川木下橋周辺



③三島コミュニティセンター



④小野橋周辺



⑤小周防ライスセンター周辺



⑥旧さつき幼稚園駐車場



⑦横尾川



⑧溝呂井川



4 所 感

畠堀 計之

島田川をはじめとする市内河川の被害地を中心に視察しましたが、平素の状況からは考えられない被害状況であり、今回の豪雨災害がいかに大規模なものであり、周辺住民の皆さんの不安は非常に大きかったことを改めて感じました。

特に、大きな被害となった島田川の増水により木下橋付近の左岸堤防がえぐられ浸食した箇所については、既に応急対応としての工事もほぼ完了しており、速やかな対応の必要なものには既に取り組みが進められていました。しかし、その他の視察場所をはじめ市内各所の非常に多い小規模の崩落、道路陥没等々、ほとんどの個所での復旧作業はこれからであり、今後、迎えることとなる台風シーズンやゲリラ豪雨なども予測できることから、安全面を最優先に早期の復旧・復興に向けた取り組みを進めていく必要があると考えます。

また、社会インフラに限らず、市民の住宅等被災についても、可能な支援やその方向性をできる限り早期に開示していくことも必要だと感じました。

田中 陽三

このたびの光市内の被災状況は、範囲が広く、また、被害も大きかった為、議員が一同に行う現地視察は、正確な情報、議員間で共通認識をとるために非常に有意義な時間でした。

あらためて大きな被害を目の前にし、島田川護岸、土砂崩れ現場等は、復旧工事が急ピッチに進められている事に驚きと共に感謝を覚え、反対に早期に対応が必要なのに未対応の西の河原川は大至急浚渫を行っていただく事、長期視点での判断をしないといけない小野橋等は、住民意見も聞きながら委員会、議会の中でもしっかりと協議が必要だと思いました。

いずれにしましても、ゴミの集積場問題等についても、このたびの豪雨災害における市の対応の検証と、今後に向けては、公表と必ず市民も交えての協議の場が必要だと思っているので、しっかり取り組んでいきたいと思います。

木村 信秀

今回の7月豪雨災害の被災状況を確認した結果、執行部の説明を受け、改めて被災の現場及びその規模等をより鮮明に知ることが出来た。家屋や小規模治山等をはじめ、被災された方々に寄り添った具体的な施策に一刻も早く取り掛かるよう、執行部に働きかけるとともに、道路・河川等の復旧については、関係各所・機関を通じて支援要請を行いたい。

また、復旧とともに、今後の復興計画が急務であることも感じている。今後に備え、的確な計画の提言に結び付けていきたい。

田邊 学

梅雨前線による豪雨で、光市内は5日から9日まで総雨量456ミリに達した。8月2日に、市内各所の被災状況を視察しましたが、この西日本を襲った活発な梅雨前線による豪雨被害は、毎年のように繰り返される梅雨末期の集中豪雨だが、これほど広範囲で同時多発的に発生するのは初めての事例と思われる。

今回の大雨は、蛇行した偏西風の影響で梅雨前線が九州から近畿にかけて長時間停滞し、さらに、7月上旬に台風7号が日本海を通過し、大量の湿った空気が流れ込んだことが要因とされる。連続発生した積乱雲が上空の風に吹かれて带状に連なる「線状降水帯」が次々と発生し、各地で観測史上最多となる記録的雨量となった。気象庁は、降り始めの5日午後から「警報級の警戒が必要」と呼び掛け、6日から7日にかけては、数十年に1度の重大な災害と判断した際に出される「大雨特別警報」を9府県に断続的に発令した。それでも、多大な被害が出てしまった。

国は土砂災害防止法を改正し、居住制限を含めた対策を強化しているが、それが各自治体で十分に機能しているとは言い難い。どうすれば警報や行政の指示が正確に住民に

伝わり、迅速な避難につながるのか。国や自治体は、治水、土砂災害対策と同時に、高齢者や乳幼児といった災害弱者の視点も踏まえ、実効性のある避難対策の検討を急ぐべきであると感じた。

従来の常識が通用しない自然災害が頻発する中、今回の豪雨被害を検証し、その教訓を今後の対策に生かしていく必要があると考える。

中本 和行

去る8月2日、両常任委員会が合同で、この度の豪雨災害被災地を視察いたしましたので報告いたします。

梅雨前線により7月5日から雨が降り始め、9日までの総雨量は450ミリに達し、島田川や小中河川が氾濫して、各所で家屋の浸水が発生しました。また、山崩れや道路の陥没等も相次ぎ、市内は大変な状況となりました。

島田川の氾濫によって、濁流が堤防を越水し、また、堤防が侵食され一部が決壊する等、予想もしない事態となったことにより、島田川を抱える周防、上島田、三井地区では、氾濫によって地域が大きく変わってしまいました。

現地を視察して、地域の被害を少しでも軽減するには、日々の生活の中で、自分たちで自分たちの安全を守る防災の意識を常に持ち、隣近所が協力して取り組むことが、災害に強いまちづくりを目指すためには必要であると強く感じました。

今後は、災害復旧を最優先としながらも、被災者に対する支援制度の周知や支援体制が確立され、一日でも早く被災者が日常生活を取り戻せるよう、関係機関と連携して復旧・復興に取り組まなければならないと思います。

仲山 哲男

災害発生から4週間近く経っての被災箇所の視察だったが、まだまだ生々しい姿の箇所もあり、改めて豪雨の凄まじさと影響範囲の広さを思い知らされた。道路・河川の被災箇所と被災ごみ集積場を見て回ったが、事前に個人的に被害を確認して回っていたが、河川の被災箇所などについては、今回初めてまじかに見ることができた。また、各地域の議員から様々な情報も得られた。

西の河原川は土砂の堆積は、これからの台風シーズンを考えると早急な対処が必要と見受けられた。島田川の被災については木下橋付近と小野橋を見たが、このサイズの河川の増水の恐ろしさが解った。個別の復旧だけでなく総合的な対策を進める必要を感じた。小河川の横尾川・溝呂井川の被災を見ても、北九州豪雨のように、小さな川でも大きな被害につながる可能性を考え、対策をしておく必要がある。

この度の豪雨は、人命に関わる被害があってもおかしくない状況であり、また今後はこの度の災害以上のことを想定する必要があると感じた。

林 節子

この度の豪雨では、島田川の氾濫により、特に島田川流域の地区（島田・小周防・三井）において大規模な浸水被害（床上・床下浸水）が起き、住宅や家財等々、多くの被害が出ました。また、市内各所で山の崩落が起き、道路が寸断され多くの場所が孤立状態となりました。私の近所でも、夜中に自宅の裏山が崩れ、「山が崩れて家まで土砂が来たため、避難所に行こうとしたが、道路が寸断され避難所まで行けない。」と、私宅に3家族が避難をされました。ご家族の不安は計り知れませんでした。

8月2日、光市内の状況を把握するため、被災地等7カ所を視察しました。

西河原川、木下橋付近、小野橋、横尾川、溝呂井川の視察では、多量の土砂の堆積や大規模な河川護岸の崩壊、橋の崩落の現状を確認する中で、水の力の脅威を感じました。

また、三島コミュニティーセンターについては、床上浸水により電話も不通となり、地域の避難所としては全く機能出来ない状態でした。今後、あらゆる災害において『機能する避難所』を考える良い機会となりました。

さらに、旧さつき幼稚園駐車場の山積みとなった被災ゴミを確認した際は、思い出が詰まった物もあるのだろうと考えると、悲哀を感じた次第です。このような状況下で、光市において人的被害が無かったことは幸いでした。

今回起きた豪雨災害を教訓として、安心・安全のまちづくりの重要性を再認識し、一日も早い復旧・復興を望みます。

森重 明美

西日本豪雨の当該被災地となった光市にとって、これまでの経験や体験からは想定しえなかった新たな被災状況や被害が発生したことを踏まえ、議会として今後の災害時代の現状と認識を新たにすべく、現地視察を行いました。

今回の視察は、ある意味、応急的な復旧状況の現場と未だ手付かずの河川等の状況を目に焼き付けることも出来、今後の防災・減災対策を再確認する意味でも、大変意義深い視察であったと思います。しかしながら、被災者においては未だ完全にすべてが終結したわけではなく、二次災害、三次災害の危機感と隣り合わせでの生活を余儀なくされている市民も多くいます。このような実態の中で、行政や議会が全て完璧な対策や支援を講じることが出来るとは思えませんが、聞く耳と何らかのフォローについては、今こそ、「議会」として必要だと感じます。と同時に、最も大切なことは、この度の被災体験と被災対応をどう次への教訓として繋げ、学びの糧としていくかです。そのために、議会権はどう活かされるべきか、が大きな課題です。